

メリー・クリスマス。みなさん、クリスマス、おめでとうございます。きのうは幼稚園のクリスマス会をしましたけれども、今日は教会のクリスマスです。で、教会では、大人も子どもも一緒に、みんなでクリスマスをお祝いしたいと思いますけれども、楽しい「クリスマス会」の前に、先ずみんなで礼拝をささげます。クリスマスは、神の御子、救い主イエス様がお生まれになったことを覚え、感謝と喜びをもって、イエス様のお誕生をお祝いする日であります。ですから、先ず、そのことを覚えて、みんなで礼拝を守りたいと思います。

さて、今日は「愛あるところに神あり」というお話ですが、これは「トルストイ」(戦争と平和、アンナ・カレーニナ、クロイツェル・ソナタ、復活等)という人が書いた本の題名でもあります。日本では「靴屋のマルチン」ということで、よく知られているお話。信愛幼稚園のお友だちは、絵本を読んでもらったので、知っていると思います。教会に来ている人も、知っている人が多いと思いますが、今日は、このお話をもう一度紹介したいと思います。

ある町にマルチンという靴屋さんが住んでいました。ですから「靴屋のマルチン」と呼ばれます。マルチンは地下室の小さな部屋に住んでいました。その小さな部屋には、小さな窓が一つだけありました。そして、その窓からは道を通る人の足だけが見えるだけでしたけれども、マルチンは、その履き物を見ただけで誰が通ったか、すぐ分かりました。みんなマルチンが作ったり、直したりした、見覚えのある靴ばかりだったからなんですね。

トントン、トントン。朝から晩までトントン、トントン。ていねいにトントン。しっかりギュッ、ギュッ。やさしくキュッ、キュッ。マルチンの靴は一生懸命のいい靴ばかり。けれども、本当は、マルチンはとてもとても悲しい気持ちで暮らしていました。マルチンの奥さんも子どもも、ずっと前に死んでしまいました。マルチンは一人ぼっちだったんですね。マルチンの心はひとりぼっちでした。それに、なんだかなんだか寂びしくて、心の中に悲しい涙がつまっていた。ある日、マルチンは、聖書を読み始めました。聖書には、神様の言葉が書いてあります。その聖書をマルチンは、毎晩、毎晩、読みました。夢中で、読みました。なぜだか心が安まりました。

ある日、マルチンは夢の中で、イエス様の声を聞きました。「マルチン、マルチン。あした行くから待っておいで」。

それで、次の日、マルチンは朝から窓の外ばかり気になっていました。「本当だろうか。本当にイエス様は来てくれるのだろうか」。マルチンは、胸がいっぱいです。

ふと、窓の外を見ると、雪かきのおじいさん(ステパニッチ)が、疲れてぼんやりしていました。「年をとって雪かきなんて、疲れることだろう。ちょうどお茶があったまっている。そうだ、あのおじいさんにご馳走しよう」。マルチンは、おじいさんに声をかけました。「少しあったまって行きませんか」。「ありがとう。助かるよ。なにしろ外は寒くてね」。おじいさんが家に入って来ました。「さあ、さあ、こっちがあったかだよ。あたたま

っておくれ。おいしいお茶もどうぞ。マルチンはおじいさんに熱いお茶を入れてあげました。「フーッ、うまい。寒いときには、熱いものが何よりのごちそうだ。」

ところで、マルチンが、窓の外ばかり気にしているので、おじいさんが聞きました。「誰か待っているのかい」。マルチンは、恥ずかしそうに答えました。「なんだかイエス様がおいでになるような、そんな気がしてね。イエス様って方は、ワシたちのような貧しい者を特別愛してらっしゃるようだ。聖書に、そう書いてあるんだよ。さあ、元気が出るから、もういっぱいどうぞだね」。マルチンはお茶をもういっぱい勧めました。雪かきのおじいさんは、心も身体もあったまって帰って行きました。

時々、北風がビューーと吹いて行きます。マルチンが仕事の手を休め、窓の外を見ると、女の人が赤ちゃんをあやしているのが見えました。赤ちゃんは泣きやまないし、女の方は、寒そうなかっこうをしています。「もし、おかみさん。うちに入りなさいな」。女の方は、夕べから何も食べていなかったの、赤ちゃんにあげるお乳がでませんでした。マルチンは、パンとスープを出してあげました。「さあ、お食べ。みんな食べてもいいんだよ」。女の方は食べて元気になりました。「でも、おまえさん、この寒さに上着もないなんて寒いだろう」。そう言って、マルチンは、自分の上着を女の人に渡しました。女の方は上着を受け取ると、泣き出してしまいました。マルチンも泣きそうになりました。女の方は、マルチンに何度も何度も御礼を言って、それから、上着を赤ちゃんにしっかりくるんで、帰って行きました。

マルチンは、また仕事にかかりました。しばらくすると、窓の外で何か声が聞こえます。男の子が、おばあさんのリンゴを取ろうとしたので、おばあさんがひどく怒っていました。マルチンは、飛び出して行って、叫びました。「まあ、まあ、おばあさん、ゆるしておやんなさいよ」。「いいや、今日という今日は、ゆるせんよ。せんだって、この小僧はワシのリンゴを盗んだんだよ」。「坊や、それは本当か。それは悪いことだよ。誰も見ていないと思っても、天の神様はちゃんと見ておられる。でも、今日は、ワシがそのリンゴを買って、お前にあげるからな」。そして、マルチンは、男の子にリンゴを一個持たせました。「おばあさん、許すって事は難しいけど、とても大切なことのようにだ」。マルチンは、小さな声で、そんなことを言いました。すると、おばあさんは「そうだね」とため息をついて、なんだかやさしい気持ちになりました。その時です。「おばあさん、ボクが荷物をもってあげるよ」と男の子は言いました。男の子も、やさしい気持ちになって、二人で仲良く帰って行きました。

マルチンは、家に帰り、また、仕事を始めました。暗くなってきたので、ランプをともし、道具を片付け、そして、棚から聖書を取り出して、きのうの続きを読もうとしました。その時、急に、きのうの夢の中のイエス様の声を思い出しました。そして、マルチンは、ふと誰かがいるような気がしました。その時です。昼間の雪かきのおじいさんが現れ、にっこり笑いながら言いました。「マルチン、マルチン。お前は、私に気がつかなかったのか」。「誰に？」。「わたしに...、あれは私なんだよ」。そして、フーッと消えました。次に、赤ちゃんを抱いた女の方も、また、おばあさんと男の子も現れ、にっこり笑いながら言いました。「マルチン、私に分からなかったのか。あれはみんな私なんだよ」。マルチンは叫

びました。「夢ではなかったんだ。本当に、本当に、ワシはイエス様にお会いできた」。マルチンの心は、喜びでいっぱいになりました。

マルチンの机の上の聖書には、イエス様のこんな言葉が記されておりました。

「お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渴いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気の見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。…… わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」。

いかがでしょうか。これが「靴屋のマルチン」のお話です。イエス様は「貧しい人、力のない人、病気の人や、家のない人」、そういう人たちの中に、いてくださるのですね。今日は、教会のクリスマス。イエス様がこの世にお出で下さった素晴らしい日です。私たちも、靴屋のマルチンのように、イエス様とお会いできるといいですね。

お祈りいたします。